
銀河の戦風

水沢玲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀河の戦風

【Nコード】

N9442I

【作者名】

水沢玲

【あらすじ】

今から千数百年後の銀河系。その一角を占めるグリユーネラント王国は小国ながら精兵を擁し、戦闘では常勝無敗を誇っていた。しかし、辺境で発生した大規模な叛乱をきっかけとして全土が未曾有の大激震に包まれる。

序章

「敵艦隊、突撃してきます！ 距離5光秒、艦艇数約300！」

スクリーンに写る敵艦隊の姿が、無音の轟きを発しつつ動き出す。戦艦ウェーゼルの広い艦橋の中央に立つ青年は、隣の壮年の男を見やる。視線を受けて男はわずかに亜麻色の髪を揺らすと、低い声で命じた。

「迎撃せよ。全艦主砲斉射三連、用意」

艦橋要員が慌ただしく動き、たちまち主砲の発射準備を整えていく。

他の艦からも射撃準備完了の報告が伝えられ、そのたびに通信担当のオペレーターが声を張り上げる。

その間にも、敵艦の姿は刻々と近づいてくる。4光秒にまで近づいた時、青年は思わず拳を握りしめ、再び隣に立つ男を見る。しかし、男は盤石の姿勢を崩さない。それを見た青年は、自分の軽拳を恥じる風にスクリーンに向きなあった。

「距離3光秒！」

オペレーターが声を上げた瞬間、青年は右手を高々と挙げ、勢いよく振り下ろした。

「撃て（フォイヤー）！」

宇宙暦923年11月26日。グリューネラント王国領アルレスハイム星系の外縁部で、1つの会戦が始まり、その日のうちに終わった。

この激しくも短い戦闘が、王国全体を襲う激震の初期微動である
ことを洞察した者は、まだいない。

1 幕開け

第4艦隊司令官・バイエルライン大將は同行者とともに部屋に入ると直立不動の体勢を取った。亜麻色の髪が微かに揺れて、止まる。

部屋の主である金髪の青年は姿勢を解くよう言うと、2人に椅子を勧めた。

細かく紋様の施された木製の椅子はさして華美ではないが、無駄な装飾を極力排する宇宙戦艦の備品としては豪華というに十分である。

それに自らも腰かけると、青年はバイエルラインに向かい口を開いた。

「ご苦労だった。いつもながら見事な勝利だ」

「ありがたいお言葉にございますが、殿下。敵が弱すぎました。私の功ではありません」

バイエルラインの表情にてらいはない。

我が正規軍200隻に対し300隻と数こそ優勢だったが、所詮は素人の叛乱軍であった。

隊列を乱しつつ無策に突撃する敵の鼻先に主砲の斉射を叩きつけ、正面から逆撃。それだけで敵はあっさりと崩れ去り、バイエルラインが用兵の妙を振るう暇もなかったのだ。

その中でも、敵が崩れる前に予備と左翼部隊の一部を時計回りに迂回させて敵の退路を絶つなど凡将ではできない指揮ぶりを見せているのだが、これなども本人に言わせれば兎戯も同然らしい。

「謙虚だな、大將は。それでも我が軍の損害がほとんどなかった

のはあなたの功績として誇ってもかまわないと思うが」

「恐れ入ります」

重ねて称賛する青年に対し、若くして艦隊司令官を務める勇将はそれ以上逆らわなかった。この部屋を訪れたのには、別の目的がある。

「ところで殿下、例の件ですが」

「ああ、艦隊情報部の報告が出来上がったのだったな。説明してくれ」

金髪の青年……グリューネラント王国王子、ハインツ・ルートヴィヒは目元を引き締め、居住まいを正して差し出された書類に翡翠色の瞳を向けた。

後年、戦場となった星系の名から安直に「アルレスハイム星域会戦」と呼称されるこの戦闘には、不可解な点があった。

なんとと言っても、叛乱軍の兵力が大きすぎる。300隻といえば、その数は実に1・5個艦隊に匹敵する。

グリューネラントの正規軍主力が5個艦隊編成である。その3割に匹敵する戦力が、辺境とはいえ自国内に忽然と現れたのだ。

しかも、軍艦を持ってきて終わりではない。宇宙船を動かすためには動力として莫大な液体水素が必要であり、熟練した乗組員が必要であり、さらに彼らを養う食糧が必要である。それらの補給物資は辺境星域の備蓄や物流では到底足りない。

何者かが後ろで糸を引いている、という推論が成立するのは極めて自然だった。

「捕獲した艦艇の調査が終了しました。叛乱初期に拿捕たほされた一部の小艦艇を除き、ほぼ全てが外国製です」

バイエルラインの報告に、ハインツは頷いた。そこまでは予想通り。

「出所は？」

「合計10ヶ国軍の艦が確認されました。その中でも全体の4割、大型艦の6割を占めていたのが、ロンバルディア製です」

「ロンバルディアか……」

グリューネラント国内を貫き銀河の彼方へと伸びる「円環航路」、ベルト・ルートその一方の端に連なるロンバルディア王国はグリューネラントにとって最大の貿易相手国であると同時に歴史的な敵国でもある。

大は国境宙域の開発問題から小は犯罪者の引き渡しに至るまで、さまざまな問題が2国間の紛争をもたらし、その解決が武力によってなされたことも稀ではない。今回の事件が外国勢力の工作であると仮定したとき、ロンバルディアは容疑の筆頭に挙げられるべき存在だった。

「シュリーフェン中将、どう思う？」

ハインツはもう一人の在室者に目を向けた。

赤毛に蒼い瞳、眼鏡をかけたシュリーフェン中将は討伐軍参謀長であり、補給や輸送の問題に詳しかった。

「確かに、ロンバルディアは第一に疑うべきでしょう。この報告

はそれを深めるもの。しかし……」

シュリーフェンは慎重さを示すように言葉を切った。

「あくまで状況証拠にすぎません。決定的な証拠を掴むまでは即断は禁物かと」

「なるほど」

バイエルラインは呟いたが、そこにはやや皮肉めいた響きがこもっていた。

「それでは物証を示しましょう。先ほど王都シャルロットンブルクより通信艦が到着しました。3個艦隊相当の戦力を有するロンバルディア軍が越境侵入、国王陛下はこれを撃つべく親しく3個艦隊を率いてエルザス星域方面へ進発されたよし」

室内の空気が大きく動いた。シュリーフェンは鼻白んだとしても、それを表に出すことはなかった。

「いかがなさいますか、殿下」

シュリーフェンの問いにハインツは考えこんだ。それも長い間ではなかった。

「戻ろう。罨であれば喰い破る必要がある。もし我々の思い過ごしだったとしても、父上の勝利にお力添えすることはできるかもしれない。2人ともご苦労だが、準備を頼む」

「はっ！」

2人は見事に声を揃えて同時に立ち上がった。それに気付いて嫌そうな視線を送るバイエルラインの横を、シュリーフェンはそ知らぬ風で退室していった。

2 帰還の途

戦艦ウェーゼル艦橋内。実用性第一の武骨な司令官用座席に腰掛け、ハインツは次第に遠ざかるアルレスハイムの太陽を眺めていた。

その前に湯気を立てるティーカップが置かれる。

見上げると、銀髪の若者が微笑みながら敬礼していた。

「思索を邪魔して申し訳ありません、殿下。しかし、冷めた紅茶を差し上げるのはさらに気が引けましたので」

そうか、と口の中で呟いて、彼は先ほど紅茶を淹れるよう命じた従卒の軍曹に目をやった。

彼が入室したのに気付かなかったために、差し出す機会を失した紅茶を持ったまま立ち尽くしていたのだろう。

「ありがとう、軍曹。ディツケルも」

王太子付副官の彼は破顔して一礼した。

カール・マティアス・ディツケル中尉。ハインツと同じ22歳である。

身長は185センチ、ハインツより5センチは高いが、ハインツがすらりとした体躯の持ち主であるために傍目には変わらないように見える。

ハインツが士官学校に1年だけ「留学」した際に同室となった縁

で知りあった。

年齢に似合わぬ知性とそれをひけらかさない落ち着きぶりに惚れ込んでいたハインツは、王宮に戻った後も彼と親交を深め、今回の遠征前に自らの次席副官に抜擢していた。

従卒が退出したあと、ディツケルはハインツに斜め後ろに立つ。しばらくは無言のまま熱い紅茶をすすり、ぼんやりとモニターを見つめる。

艦隊の前衛を務める数艦が突然、跡形もなく姿を消した。ワープ可能ポイントに達し、跳躍航法を起動させたようだ。

ハインツが重い口を開いたのは、カップの中身が半分ほどに減ったことだった。

「なあ、ディツケル。変だと思わないか？」

「何がございましょう？」

抜けた主語を予測しながら、ディツケルは敢えて聞き返した。

何か悩んでいる時のハインツは、ゆっくりと思考をまとめながら話す必要があることをこの友人兼副官は知っていた。

「今回の叛乱がロンバルディアの手によるものだったとしてだ、その目的は何だ？」

「兵力の分散を強いることでしょう。現に、わが第4艦隊が討伐のため王都を離れました」

ハインツは機械的に頷いた。

「それではだ、なぜ敵は3個艦隊などという半端な兵力で侵入した？ 仮に陛下が大事を取って叛乱鎮定に2個艦隊を送ったとしても、王都には3個が残る。侵入した軍勢を撃破するには十分だ」

同数の兵力で敵に当たるという用兵の邪道とも言える考えが、グリユーネラント軍部では常識としてまかり通っていた。

グリユーネラントは小国だが列強に周囲を固められ、しかも円環航路という莫大な利益をもたらす貿易路を狙った勢力の侵入に絶えずさらされている。そのような状況で取るべきは、質で数を補う道だった。他国に例を見ない厳しい訓練、中継貿易の利益をつぎ込んでの装備更新、そして何よりも幾多の実戦に裏打ちされた本物の強さ。

「グリユーネラントの1個艦隊は他国の2個艦隊と同等」という言葉は誇張ではなく、誇示ですらなく、戦史統計上の単なる事実である。

とりわけロンバルディアはグリユーネラントの強さは身にしみて学んでいるはずだ。多数の手痛い教訓によって。まして常備13個もの艦隊を擁する大国なのだから、その戦略は数で押すのが基本となる。過去の戦闘もそうだった。

にも関わらず同等かそれ以下の兵力で攻めてくる。しかも、わざわざ派手な策を弄しながらそれを活かす様子もない。その不自然な動きが、ハインツには誘いをかけているように見えてならないのだった。

「畏、ということですか？」

「だとしたら、どのような策が考えられる？」

質問に質問を返され、ディツケルは糸のような目をさらに細めた。

スクリーンの中で、ウェーゼルの眼前を航行していた駆逐艦がワープ航法に乗り姿を消した。

「考えられるのは2通りあります。1つは陽動作戦です」

「つまり、来攻した艦隊は囷、あるいは支隊にすぎないということだな」

「御意」

主力の出動した王都は手薄になる。そこを敵主力が衝けば容易に占領することができるだろう。

そうでなくとも、多方面から包囲するように侵攻してくる敵は対処に難しい。一方に相對している間に他方に後方への迂回を許す危険性があるためだ。

これを外線作戦といい、グリユーネラント参謀本部が最も警戒している戦術の1つである。

「とすれば、我が軍主力は迷わず敵支隊を撃ち、一方王都駐留の予備兵力をもって敵主力を足止めしつつ、主力の来援を待つのが方針になりましょう。その場合、我々がシャルロットテンブルクに戻り王都防衛に加わることは大きな意味があります」

ディツケルの言う通り、王都防衛戦力が倍増すれば戦略的な選択の幅が広がり、相当の強敵にも対処することが可能となる。

ハインツが辺境平定を後回しにして王都帰還を決断し、バイエルラインやシュリーフェンがそれを支持したのはこの点を重視したからに他ならない。

「もう1つは？」

「敵が計略によって兵力を過小に見せている場合です」

つまり、味方の軍勢を小さく見せ、敵の侮りを生んで畏にはめる

という戦法だ。3個艦隊が実は6個艦隊だった、ということになれば、さすがに我が方に勝ち目は薄い。

敵の兵力が少ない時は、必ず王都に予備兵力を残すのがグリユーネラントのやり方だ。それは常に多方面からの奇襲を警戒せねばならないこの国の弱点をも示しているのだが、その習性をロンバルディアが利用したとしたら。

「しかし、そう簡単に実行できるものではありません。何百隻もの艦艇を隠すなど……」

笑いながら自身の考えを否定する副官の声を、ハインツが遮った。

「しかし、ロンバルディアには若いながらかなり優秀な提督がいるという。警戒しすぎることはないはずだ」

「ブオナパルテ元帥ですね」

王太子の常にない執着ぶりにやや面食らいながら、ディツケルはここ数年で頻繁に聞くようになった名前を挙げた。

「しかし、彼でも艦隊を透明にする魔法は使えないでしょう。我が軍の哨戒網の前で、数をごまかすなど不可能に近いかと。大物の内通者でもいれば話は別でしょうが」

ディツケルの下手な冗談に、ハインツは感応しなかった。

内通者。この言葉が彼の思考回路に引っ掛かり、海藻のようにまとわりついて容易に離れない。

考え込みながら自身の金髪を無意識にいじり始めた時、耳障りなブザー音が2人の鼓膜を刺激した。

『艦長より総員に告ぐ。本艦はワープ航法に突入する。衝撃に備

え」

次の瞬間、微かな振動とともに外部を写し出していた全てのモニターが真っ白になった。

11月29日、慌ただしく戦後処理をすませた討伐軍はアルレスハイムを発ち、王都シャルロットンブルクに針路を向けた。

この前日、国王オトフリート三世率いる艦隊はロンバルディア方面の边境星域にて敵軍と衝突している。

「ストラスブルク星域会戦」である。

3 遭遇戦

12月7日、王太子率いる征討軍はディー・プファルツ星系に達していた。

王都シャルロットエンブルクを擁するザルツラント星系まで約180光年、ワープ航法で1日半の距離である。

小さなガス惑星1つしかないこの恒星系は、軍の基地を兼ねたごく小さな補給ステーションが設けられているほか特徴のある場所ではない。円環航路上にあるものの、王都に近すぎるため宇宙船の泊地として利用する価値も少ない。

ハインツらにとつては、王都へ向けて駆け足で通り過ぎるだけの星であるはずだった。

「どうした！」

バイエルライン大將は艦橋に飛び込むなり叫んだ。ベッドに潜り込んで1時間足らずで警報に叩き起こされたものだから、やや機嫌が悪い。

続いてハインツとディッケルが金銀の髪を乱しながら入ってきた。朝食の途中だったのだろう、ディッケルの右頬にパン屑がついたままだ。

第4艦隊のオイゲン参謀長が緊張の色をにじませ、モニターを指し示しつつ彼らに説明した。

「11時方向、距離12光秒に艦艇6隻、距離18光秒に50隻程度の小集団を発見。先行の艦は我が軍の巡航艦ダンツイヒと名乗り、『敵の追撃を受けつつあり』として救援を求めてきました」

「敵、だと？」

思わずバイエルラインが唸った。

ここはグリューネラント国土の最深部である。敵と呼ばれる存在が容易に入り込める宙域ではない。

「考えるのは後にしましょう。今は目の前の味方を救うのが先決です」

後からやってきたシュリーフェン中将が正論を述べた。

バイエルラインもその正しさは認めざるをえなかったので、不機嫌そうな顔をさらに不機嫌にしながらハインツの許可を取り、指示を出し始めた。

艦隊航行に適した細長い形から、鶴が翼を広げて敵の針路を囲むような陣形に変わる。洗練された無駄のない艦の動き、組みあがられていく陣形の見事さは芸術的と言っても差し支えない。

追跡に夢中だった敵艦隊もようやく自己の危険に気付き、反転を始める。

その動きを見たバイエルラインは機を逃さず、短く鋭く命令を下した。

「ビューロー、ガーラント、行け！」

鶴の右側の翼が千切れ、けしかけられた獵犬のように飛び出し、敵の左翼側に回り込もうとする。

第5艦隊きつての勇将、ビューロー中将率いる分艦隊は艦艇数5

0隻。新鋭の巡航艦と駆逐艦で構成され、そのスピードは他の追隨を許さない。

同時に、後衛に控えていたガーラント少将指揮下の戦闘艇母艦10隻から戦闘艇が発艦を始める。

戦闘艇は基地や母艦から出撃する超小型の高速艇で、1機あたりの攻撃力は低いが数と軽快な運動性能を活かして様々な任務に使用される。

時を経ずして300機ほどにまで膨れ上がった戦闘艇部隊は、戦艦や巡航艦の艦列の間をすり抜けると一直線に敵艦隊へ襲いかかった。

先頭を切って飛ぶ100機ほどの細長い流麗な機体は、同じ戦闘艇を相手に戦う戦闘機型、「シュヴァルベ」。指揮官はマルセイユ大尉。

「それ、行け！ 攻撃機に近づけるな！」

敵味方とも電波妨害が激しく、すでに無線は使えない。識別灯を3回点滅させ突撃の合図を送ると、マルセイユ自身も操縦桿を握りしめ、目の前の1機に狙いを定めた。

すれ違いざまに機銃を1連射し、すぐに反転。旋回性能に優れるシュヴァルベは、あっさりと敵の後ろを取った。

「悪く思っなよ」

マルセイユがボタンを押すと同時に短距離ミサイルが放たれ、白い尾を引いて敵機に吸い込まれる。デコイを放つどころか回避する暇も与えられず、丸みを帯びた大型の機体は四散した。

次の獲物を探して周囲を探るが、すでに敵はいない。わずか20機ほどの敵戦闘機は1分足らずで全滅していた。

「あれ、もう終わりか。つまらん」

欲求不満気味のマルセイユたちを尻目に、今度は俺たちの出番だ
とばかりに流線型の機首を持つ攻撃機型「コメート」がリヒトホー
フエン中佐に率いられ艦隊に襲いかかった。

戦艦、巡航艦、駆逐艦が無数の銃弾を吐き出し、暗黒の闇を紅く
染める中を、4機ごとに別れたコメートの編隊は悠々と泳いでいく。
密度の高くない対空砲火は、熟練のパイロットたちに微塵の恐怖も
与えていない。

「10時半方向の巡航艦を狙うぞ。距離2光秒」

爆撃手席に座るリヒトホーフエンが操縦士のカルナツ准尉に目
標を指示すると、前席よりからかうような声が聞こえた。

「珍しいですね、隊長が弱いものいじめするなんて。いつも一番
危ないところを狙わされてるってのに」

「なに、たまには楽させてやろうってんだ。今のうちに感謝しと
け」

「後がこわいなあ」

劣化ウラン弾の嵐を潜り抜けると、リヒトホーフエン機は敵の右
翼の一番外側で砲火を張る巡航艦めがけ直線の衝突コースに入った。

「よし、そのまま……用意、投下!」

胴体下部の爆弾倉から大型の爆弾が切り離されると同時にカルナ
ツプは思い切り操縦桿を引いた。

機体は機首を上げるとそのまま艦の外殻をなめるようにして通り
抜け、放たれた爆弾は慣性の法則に従い目標へ向けて真っ直ぐ突き
進む。

「よし、命中だ!」

巡航艦の艦体から火柱が吹き出し、もぎ取られた銃座がくるくる
と回転しながら宇宙の虚空へ飛び去って行く。

後続の列機がさらに爆弾を叩きつける。放たれた3発のうち2発が新たに命中し、巡航艦を激しく震動させた。

爆弾1発当たりの威力は小さいが、何しろ艇数が多い。コメントの攻撃は敵の逃げ足を鈍らせ、その体力を奪っていった。

だがやがて、彼らの活動は終わりを告げる。艦と戦闘艇が密集する宙域を貫く図太いエネルギーの束がその合図だった。

第4艦隊本隊が敵を捕捉し、ようやく砲門を開いたのだ。

「よし、仕事は終わりだ。ずらかるぞ」

もともと彼らの主任務は敵の攪乱と足止め。敵艦撃沈の名誉に固執して味方の攻撃に巻き込まれるのも馬鹿らしい。とりあえずこの場は軍艦に主役を明け渡すのが賢明だった。

「撃て（フォイヤー）！」

ハインツの号令一下、8隻の戦艦がビームを吐き出す。

その威力は大型爆弾の比ではない。巡航艦の装甲など熱したバタリのようにとろけてしまう。

駆逐艦に至っては一撃で機関部まで貫通され、白い閃光を発して爆発するものもあるほどだ。

鶴の右の翼をなしていたビューロー部隊が切り離され、残された本隊は左翼が前に出た斜形陣となり、左翼側、つまり敵の右翼部隊から集中的に切り崩している。

戦闘艇の間断ない襲撃により統制の乱れた敵艦隊は、陣形を整えられないままバイエルラインの猛撃を受けることとなった。

巡航艦の艦尾から太い矢が串刺しにする。

機動性を活かして必死に逃げる駆逐艦にはコメントが容赦なく襲いかかり半身不随にしていく。
それをくぐり抜けても、そこでは後方に回り込んだビューロー部隊が正確な砲火で応対する。

十字砲火の中で、敵艦隊は着実に数を減らして行った。

「1時方向に戦艦！ 仰角5度、距離4光秒」
オペレーターの声に反応してハインツがモニターに緑色の瞳を向ける。

オペレーターが無言の要求に答えて望遠カメラをズームさせると、確かに戦艦が2隻、全速力で向かって来るのが見えた。

グリーンエラントの戦艦に比べて艦体が細長く、かなり華奢な印象を受ける。

「脱出の時間を稼ぐつもりかな」

「でしような」

王太子の呟きに、バイエルラインが小さく頷く。慌てる様子もない。

「射撃目標変更、敵戦艦の1番艦。いけるか？」

「やや遠めですが、当ててみせますよ」

髭面のザイドリッツ艦長の問いに、若い砲術長が自信ありげに頷いてみせる。

「よし、撃ち方始め！」

砲術長の言葉通り、戦艦ウェーゼルの第2斉射が敵を捉えた。

4発の直撃を受けた戦艦は、舵を失ったのか火を吹きながらゆっくりと回転し始める。

ウェーゼル艦橋を歓声が包んだ。

「よし、次は2番艦に照準……」

威勢のいいザイドリッツ大佐の語調が急速にしぼんだ。

敵戦艦の推進炎が突如消滅し、同時に艦首部の信号灯が明滅を始めるのが確認されたからだ。

「敵戦艦より信号です。『我、降伏す。寛大な措置の取られんことを希望す』」

他の艦も砲門を閉じ、機関を止める。その様子を確認したザイドリッツは、振り上げた拳を降ろし損ねたような複雑な表情で後ろの司令官を見た。

ハインツもあっさりした終局に拍子抜けの感があったが、彼にはやらなければいけないことがある。バイエルラインに促され、彼は通信士官に命じた。

「全艦に通信。砲撃やめ、拿捕用意」

こうしてわずか1時間半で戦闘は終了した。
第4艦隊の損害はコメート1機大破、人的被害はなし。完勝である。

4 進むべき道

「ディツケル中尉他1名、入室許可を願います」

『入れ』

声とともに空気の抜ける音が廊下に響き、目の前の扉が開く。

会議室には王太子ハインツ、バイエルライン大将をはじめとする征討軍と第4艦隊の司令部要員に加え、ビューロー中将、ガーラント少将ら分艦隊司令官とその高級幕僚が勢揃いしていた。

将官、佐官がずらりと並んでいる姿は、一中尉に息苦しいほどの威圧感を与える。それに対抗するために、ディツケルは腹に思い切り力を込めなければならなかった。

「『ダンツイヒ』艦長リリエンクロン中佐をお連れしました！」

「うん、ご苦労」 対照的に、歩み出たハインツは優雅な動作で敬礼すると、緊張で強ばっている白髪の老中佐に微笑みながら握手を求める。

同い年の青年がこれほど堂々と振る舞えることに、ディツケルはいつもながら感嘆の意を禁じ得ない。

余裕のある挙措は若さを隠すための仮面であるにせよ、その姿に威風とでも言つべき雰囲気すら漂っているのは王家の血筋のなせる業だろうか。

「疲れているところをわざわざ来てもらって申し訳ない。どうぞ座ってくれ」

着席した全員の目の前にコーヒークラスが置かれるのを待って、議長役を務めるシュリーフェン中将がおもむろに口を開いた。

「それでは始めよう。クラスト大佐」

「はっ」

長身の情報参謀は立ち上がると、会議の参加者に手元の資料を開くように告げた。

「つまり、我が軍は負けたのだな」

「その通りです」

1時間に渡る艦隊情報部の報告を、シュリーフェンが1文に纏めてみせた。

国王オトフリート三世の親率する迎撃軍は11月28日、ストラブルク星系においてロンバルディア軍と交戦し、大敗を喫した。艦艇600隻、兵員30万名のうち少なくとも半数が失われ、国王陛下、参謀総長ナウマン上級大将はじめ将兵の大半は行方不明。

直接の敗因は、敵の戦力を読み違えたこと。

我が方の近衛、第1、第3の3個艦隊に対し、敵の指揮官ブオナバルテ元帥は実に7個艦隊を集中。前情報を2倍以上も上回る戦力の前に、グリューネラントの鬼神のごとき戦闘力も抗い切れなかった。

なぜ我が軍の哨戒網は敵の兵力を3個艦隊と報告したのか、それ

は解明されなければならない謎だが、しかし緊急の問題でもない。
最優先の課題は現状の正確な把握であり、それを基に我々の行動すべき道を探ることであつた。

それまで腕を組み押し黙っていたバイエルラインが手を上げ発言を求めた。

「現在のロンバルディア軍の戦力配置を説明してもらいたい」

首肯したクライストは、判明している限りのものだと前置きしてから手元の端末を操作した。

微かな電子起動音とともに、会議室中央の3Dスクリーンに星図が出る。王都周辺からロンバルディアの国境宙域にわたる航図だ。

「青い矢印はグリューネラント艦隊を、赤い矢印はロンバルディア艦隊を示しています」

クライストの説明に、立ったまま会議に陪席していたディツケルはやや身を乗り出して航図を見つめた。

王都星域のすぐ隣に我が艦隊の印がある。その反対側、5個の赤い矢印が集中して青い矢印を包囲している場所が、強調するように白く点滅している。

「ストラスブルクの会戦後、ブオナパルテ元帥は主力5個を率いて王都目指し輪環航路沿いに進撃。これを王都駐留の第2艦隊がエストラ星系にて迎撃、12月2日より戦闘が発生しています」

大佐が再び端末に手を触れると、王都の回りに散在している小さ

な赤い矢印が光り出した。

「1個艦隊は輪環航路を避け、エイストラ星系を迂回してシャルロットンブルク星系外縁部に達し、航路を封鎖中。我らが遭遇したのはこの支隊と思われます。残り1個艦隊がストラスブルクに残留していますが、これは部隊再編成と戦後処理を行っていると推測しています」

つまり、王都はすでに半ば敵の手中にあるということだ。

敵との戦力差は約3倍、それも第2艦隊が戦力を保っている場合の数字だ。

それと承知の上で敢えて死地に飛び込むべきか。最終的に決断するのは弱冠22歳の青年である。

「殿下、何かご質問は……」

シュリーフェンに水を向けられ、ハインツは軽く頷くと正面の下座を向く。

「リリエンクローン中佐」

「はっ……」

オブザーバーと呼ばれた方がいいが、仕事もなくひたすら縮こまっていた老中佐は、弾かれたように顔を上げた。

「貴官はエイストラの防衛戦に参加していたな。戦いの様子を話してくれ」

「は、かしこまりました」

巡航艦ダンツイヒは第1艦隊に属し、ストラスブルク星域会戦に

参加。損傷しながらも辛うじて戦線離脱を果たした。

その後第2艦隊の指揮下に入りエイストラ星系の迎撃戦に加わるが、戦艦の砲撃を受け大破し後退を余儀なくされた。

機関と主砲の半分は無事だったため応急修理ののち第4艦隊への強行連絡任務を命ぜられ、12月5日早朝にエイストラを進発。ところがデュー・プファルツ星系外縁部でロンバルディアの別動隊に捕捉され、必死に逃げ回っていたのだった。

「私がエイストラを離れた3日前の時点では、第2艦隊のビルケンシュトック提督は陣形を保ち善戦しており、司令部も健在でした。勝てぬまでも、簡単に敗れはしないでしょ」

「わが艦隊が来援するまで持ちこたえている可能性はあるか？」
「十分に」

大きく首を振るリリエンクローンの表情には熱意がこもっていた。

考え込む王太子に、黒髪の情報参謀が声をかけた。

「おそれながら申し上げます、殿下。わが艦隊の価値をお考えください。我々は今や王国軍唯一の機動戦力です。我々が潰えれば、国土奪還の道は絶たれます。軽拳はお慎みくださいますよう」

「待て、大佐！」

激情家のビューロー中将が机を激しく叩き声を荒げた。

「では、第2艦隊は見捨てるといえるのか。孤軍奮闘する味方を切り捨てるのが我が軍の流儀か！」

「大局を見据えろということですよ、ビューロー提督」
いきり立つビューローを、艦隊参謀長のオイゲン中将がやんわりと制した。

「不利を承知で第2艦隊が撃つて出たのは王都陥落までの時間を稼ぐため、そして我が艦隊に情報を得るための時間を与えるためと考えられます。本来ならば王都を放棄して我々と合流し再起を図るべき状況ですが、ビルケンシュトック提督はそれすら危険と判断したのでしょう」

勇将、猛将揃いの第4艦隊の中で「一番の良識人」と称されるだけあって、おっとりした気性ながらオイゲンの論法はビューローの反論を許さない。

言葉に詰まった若い部下を見て、バイエルラインが助け船を出した。

「だがな、オイゲン、我々が戦後処理すら後回しにして帰投の途中だとはビルケンシュトック提督も考えていないだろう。提督らを救える可能性があるのならば進むべきではないか？」

反論したのはオイゲンではなくクライスト大佐だった。

「客観的に分の悪い賭けであることには違いがありません。閣下とビルケンシュトック提督が懇意であることは存じておりますが、どうか私情を交えることはなさらぬよう」

しまったとしても言いたげにオイゲンの唇が歪んだ。ディツケルも直言を恐れぬ情報参謀のミスに気付いた。クライストの物言いは明らかに上官の逆鱗を逆撫するものだった。

「そのような私人としての発言ではない。見損なうな！」
さすがに激したバイエルラインがさらに語を継ごうとしたとき、大きな音とともにテーブルが揺れた。

衆目が音源に集まる。

その視線の先で、シュリーフェンはすました顔で軽く手を払ってから口を開いた。

「いかに忌憚なき意見を求める場であっても、発言に際し最低限の礼儀は必要であろう。クライスト大佐、謝罪せよ」

「はっ、言葉が過ぎました。申し訳ありません、バイエルライン閣下」

頭を下げたクライストに対し、出鼻を挫かれた形のバイエルラインもあつさりと頷いた。もともと他人の礼儀に頓着するタイプの男ではない。

鮮やかに争いを収めてみせた赤毛の討伐軍参謀長は、続いて上座のハインツに向き直った。

「さて、時間もありません。殿下、ご決断を」

十数対の視線が王太子を見つめ、彼はそれを遮るように目を閉じ呼吸を整えた。

彼の肚の内は事前に聞いており、今の議論が彼の意見を変えることはなかったらうとディツケルは思う。

しかしそれを言葉にするのは、敵ヘレーザー銃の引き金を引くのととは別種の勇気がいる。

それは第2、第4艦隊合わせ20万名の生命を左右する決断なのだから。

緊迫した10秒ほどの後、目を開けたハインツは翡翠色の瞳で自分を見つめる士官たちを見返し、慎重に言葉を紡ぎ出した。

「友軍の苦戦を見捨てることは、私にはできない。わずかでも救える可能性があるなら、それに賭けたい。もちろん、我が艦隊が危険にさらされた時はただちに撤退する。敵は強力であり、困難な戦いになるだろうが、我が艦隊には切り抜けるだけの技量と経験がある。そう信じていいだろう？」

否定の返答を求めている問いかけに、ある者は大きく、ある者は小さく頷いた。

もう一度、会議室の中を見回すと、うら若い王太子は決然と命令を発した。

「艦隊を二分する。陸戦部隊および後方支援部隊は護衛を伴い後退せよ。艦隊主力は第2艦隊救援のためエイストラ突入を目指す。ただちに進発の準備をせよ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9442i/>

銀河の戦風

2010年10月9日07時57分発行